

# 看護学実習グループの人間関係に関する文献研究

水 口 陽 子

新潟県立看護短期大学

## The Document Research on Interpersonal Relationship of Group in Nursing Clinical Practice

Yoko MIZUGUCHI

Niigata College of Nursing

**Summary** The nursing clinical practice is studied in the form of the practice group, and it is effective that an idea each others is developed. The group does not function enough if the interpersonal relationship does not succeed. Then, the research trend and the problem of the research of the interpersonal relationship of the nursing clinical practice group in Japan of 20 years in the past were examined. The number of documents was 31. There were examined from the side of the composition factor of group dynamics, the group dynamics and the practice satisfaction feeling and the result, the group organization, the educational approach and group dynamics, the conditions of group dynamics.

**要 約** 看護学実習は実習グループの形態で学習しており、お互いの思考を発展させる等の学習効果はあるが、人間関係がうまくいかない場合には十分な効果が得られないと言われている。そこで日本における看護学実習のグループの人間関係の研究について、過去 20 年間の研究動向と課題を検討した。文献数は 31 で、実習グループにおけるグループダイナミクスの構成要因の検討、グループダイナミクスと実習満足感・実習成果、意図的な実習グループ編成による教育効果、教育的関わりとグループダイナミクス、グループダイナミクスの実態の側面から検討されていた。

**Key words** 看護学実習 (nursing clinical practice)  
グループ (group)  
人間関係 (interpersonal relationship)  
文献 (document)

## 1. はじめに

看護学実習は、一般に実習グループの形態をとり学習している。グループ学習のメリットは、集団において他者の考えを共有しながら問題解決のプロセスを体験できること、自分自身のあり方を他者との関係において学習できることであるといわれているが、デメリットとしては、人間関係がうまくいかない時にグループ全体が機能せず、学習効果が上がらないと考えられている<sup>1)</sup>。看護学実習期間は長期にわたり、実習中はお互いの動きが見えたり、カンファレンス等で体験や考えを共有して学習することから、グループの関係がメンバーの学習状況に及ぼす影響は大きいと考える。

看護教育では実習及び演習等のグループ学習が多用されているが、グループに関する理論的基盤を持つ取り組みは少ないことが指摘されている<sup>2)</sup>。そこで、日本における看護学実習におけるグループの人間関係の研究に焦点を当て、研究の動向と課題について検討した。

## 2. 分析の枠組み

### 1) 対象文献の選定

対象文献については、医学中央雑誌 Web 版及び CD-ROM 版を用いて、1983～2002 年の 20 年間に発表された国内の文献を「看護学実習」「実習」「実習 and グループ」「実習 and 人間関係」のキーワードで検索する。さらに、この中から看護学実習グループの人間関係に関する文献を抽出する。

文献の範囲は「看護学会誌」「看護系雑誌」「看護系大学紀要」「看護系短期大学紀要」とし、研究の全体的な傾向を検討するため、原著論文、論文、研究報告、学会抄録及び集録を分析に用いる文献とした。

### 2) 分析方法

抽出した文献について、研究対象、研究方法、研究内容について検討する。研究対象は、対象学生の所属校の種類、実習領域別に分類した。研究方法については、D.F. ポーリット、B.F. ハングラーの著書<sup>3)</sup>を参考に分析した。研究内容に関しては、内容の類似性の観点からカテゴリーに分類した。

## 3. 研究の動向

### 1) 研究の全体的動向

(1)抽出した看護学実習グループの人間関係に関する

文献は 31 件であった。年代別にみると、1983～1987 年が 3 件、1988～1992 年が 7 件、1993 年～1997 年が 11 件、1998～2002 年が 10 件であった。

(2)対象は、対象学生の所属校別では、看護短期大学 15 件、看護専門学校 15 件、看護系大学 1 件であった。

実習領域別では、成人看護学実習 2 件、基礎看護学実習と成人看護学実習 2 件、成人看護学実習と老年看護学実習 1 件、精神看護学実習 2 件、領域別実習 12 件、記載なし 12 件であった。

(3)研究方法は質的研究 1 件、量的研究 17 件、質量併用研究 13 件であった。研究デザイン別では、調査研究 27 件、準実験研究 4 件であった。

### 2) 研究内容

看護学実習グループの人間関係に関する研究内容は内容の類似性に基づき、グループダイナミクスの構成要因の検討、グループダイナミクスと実習満足感・実習成果、意図的な実習グループ編成による教育効果、教育的関わりとグループダイナミクス、グループダイナミクスの実態に分類できた。(表 1、表 2)

これらの研究はいずれもグループダイナミクス及びグループ学習における人間関係の視点を基に検討されていた。そこでまず、グループダイナミクス及びグループ学習の歴史的背景について概括する。

#### (1)グループダイナミクスの歴史的背景

グループダイナミクスの研究は 1930 年代頃から盛んとなり、ホーソン実験は、今日の産業社会学及びグループダイナミクスの分野に多大な影響を与えた。この実験は工場における生産性向上に関わる因子を探索する目的で行われ、人間関係のあり方が生産性の向上に関係するという実態が明らかになった。集団の力動的性質や集団の変化を観察し、その理論化と実践を行う方法としてグループダイナミクスがレヴィン (Lewin, K.) により 1939 年に確立された<sup>4)</sup>。また、モレノ (Moreno, J.L.) は、ソシオメトリー理論を提唱し、成因相互の感情的結合 (魅力と排斥) について測定するソシオメトリックテストを開発した。

日本では、三隅二不二らの社会心理学の研究者がグループダイナミクスの考えを学び、集団機能という視点からリーダーシップの類型化を試みた理論である PM 理論をうち立てた。集団機能は、課題解決及び目標達成に関する機能 (performance function, P 機能) と集団存続や維持に関する機能 (maintenance func-

表1 看護学実習グループの人間関係に関する研究(その1)

文献番号 (引用文献 対応番号)	研究内容	研究 デザイン	調査方法・調査内容(調査項目)
1(7)	実習グループのまとまり度を学生の主観により評価し、そのときの心理や思いを明らかにする	調査研究	質問紙調査票:グループまとまり度(学生の主観による評価)と学生の心理(自由記載)
2(8)	実習グループを肯定的に認識するためのグループダイナミクスの構成要因を検討する	調査研究	質問紙調査票:グループへの肯定的認識(グループに所属して良かったかどうかの質問) グループダイナミクスの構成要因(20項目)
3(9)	実習グループに関する肯定的な認識に関わる要因の検討を編成後の経過にしたがって行う	調査研究	質問紙調査表:グループへの肯定的認識の有無、グループダイナミクスの構成要因(20項目)
4(10)	実習グループを肯定的に認識するためのグループダイナミクスを有効に働かせるための要因を検討する	調査研究	質問紙調査票:グループ評価とグループダイナミクスを有効に働かせるための要因(グループは自分にとってプラスか、グループダイナミクスを有効に働かせるために必要と研究者が考えた15項目)
5(11)	学生の達成関連動機の特徴とグループの肯定的反応度合いとの関連からグループダイナミクスを有効に機能させる示唆を得る	調査研究	質問紙調査票:グループへの肯定的認識の有無(グループの現状維持か再編成の希望か) 達成関連動機の測定尺度(選択回答・得点)
6(12)	実習のグループ活動に関する学生の自己評価から学生が見たまとまりの基準を知る	調査研究	質問紙調査:グループに対する自己評価とグループ活動を進める要因(グループの良かった点と悪かった点、グループ活動をうまくすすめるのはどのような人か、妨げるのはどのような人か)
7(13)	指摘しあえるグループはグループダイナミクスが有効であるとし、グループダイナミクスが効果的に働くための構成要因を分析し明らかにする	調査研究	質問紙調査票:指摘しあえるかどうかの設問項目、対人相互作用を構成する要因の設問項目
8(14)	指摘しあえるグループはグループダイナミクスが有効であるとし、メンバーの健康度や生活習慣との関連を検討する	調査研究	質問紙調査票:指摘しあえるかどうかの設問項目 東大式健康調査票:健康度、生活習慣問診票:生活習慣
9(15)	実習グループの人間関係の構造を明らかにし、グループ関係と学生の自尊感情及び実習関連要因との関係を検討し実習指導上の示唆を得る	調査研究	質問紙調査票:自尊感情(Rosenberg.Mの作成した尺度の修正をした質問項目)、グループ関係(先行文献から選出した質問項目)
10(16)	グループのエゴグラムと学生の自己評価との関係の検討から望ましいグループ編成を考える	調査研究	チェックリスト(エゴグラムチェックリスト):エゴグラムパターン 自己評価表:実習の自己評価(看護過程、看護技術、実習態度に関する15項目)
11(17)	実習グループのエゴグラムパターンのパターンの分析とグループの自己評価、臨床実習評価との関連を検討する	調査研究	チェックリスト(東大式エゴグラムチェックリスト):グループのエゴグラムパターン 質問紙調査:グループ評価(グループ自己評価はPM機能の評価項目、実習評価は成績<評価点>)
12(18)	グループのまとまり度と実習満足感及び実習の効果の関係を検討する	調査研究	検査用紙(ソシオメトリックテスト):グループのまとまり度 質問紙調査:実習満足感
13(19)	グループメンバー間の相互関係の実習場面での実態を明らかにし、実習成果との関連を検討する	調査研究	質問紙調査:グループ人間関係(ソシオメトリックテストを参考に作成した項目)、実習成果(グループのある個人と親しくなったきっかけ・理由、人間関係の実習上の障害や効果的となった事項)
14(20)	グループのまとまりと実習達成感の関係を検討する	調査研究	質問紙調査票:グループのまとまり(エバンス等の集団態度スケールからの凝集性項目をもとに作成した項目)、実習達成感(MBIを参考に作成した項目)
15(21)	実習グループの人間関係と実習満足感の関係を明らかにし望ましいグループを考える	調査研究	質問紙調査票:グループの人間関係(PM機能から作成した項目)、実習満足感(マズローの欲求階層説に基づく満足感に影響を与える因子から作成した項目)
16(22)	実習グループにおけるコミュニケーションの状態、人間関係、体験内容の実態を把握し、人間関係と実習意欲の関係を探る	調査研究	質問紙調査:グループの状態(コミュニケーションの状態<表現しやすさ>、人間関係の緊密さと緊密になったきっかけ、人間関係と実習意欲の関係、グループで体験した気持・体験内容)
17(23)	実習におけるグループダイナミクスと自己評価、実習意欲との関連を検討する	調査研究	自己評価表:自己評価 質問紙調査:グループの印象(自由記載)、実習意欲とグループダイナミクスの状態

表2 看護学実習グループの人間関係に関する研究(その2)

文献番号 (引用文献 対応番号)	研究内容	研究 デザイン	調査方法・調査内容(調査項目)
18(24)	グループ編成とグループ機能の評価及び実習達成感との関係を検討する	準実験研究	検査用紙:グループ編成基準(エゴグラムとYG性格検査)、学科成績(点数) 調査票:実習の達成感(実習の体験内容、技術の到達度、グループダイナミクスのPM機能の評価)
19(25)	長期実習における意図的なグループ編成による教育効果を検討する	準実験研究	検査用紙:グループ編成基準(YG性格検査、エゴグラム)、学科成績(点数) 質問紙調査:達成感・教育効果(実習体験内容、実習成績、グループダイナミクスPM機能の評価)
20(26)	ソシオメトリ理論によるグループ編成を試みて実習評価得点との関連を検討する	調査研究	検査用紙(ソシオメトリックテスト):グループのまとまり度、実習評価点:実習評価
21(27)	グループ編成時にグループ成員間に相互選択があるとまとまりやすいという観点から編成し、実習での集団構造の変化を検討しまとまり度の状態を明らかにした	準実験研究	検査用紙(ソシオメトリックテスト):グループのまとまり度
22(28)	実習グループメンバー固定化に関する学生の評価と意見・感想について分析検討する	調査研究	質問紙調査:グループメンバー固定化に対する学生の評価・意見(研究者の作成したグループ固定化の肯定・否定の意識、グループ固定化の効果、グループ固定化の意見・感想)
23(29)	実習グループの凝集性を高める動機づけの有無によるグループ内の相互作用の状態を比較検討する	準実験研究	質問紙調査:実習前後の合意反応と非合意反応(10 答法)、実習前後の対人相互作用(対人魅力測定尺度)、実習の学び(自由記載)
24(30)	「人間関係」についての導入教育を行い、実習への満足度、対象者への人間理解、実習体験に関する感想を調査し、教育効果を検討する	調査研究	質問紙調査:実習の満足度、対象者への人間関係における気がかりへのコーピングの型、実習体験の感想、実習への期待内容及び体験の帰属
25(31)	グループの凝集性を高めることを目的に実習のまとめ(フィードバック)を行い、グループの凝集性について検討する	調査研究	質問紙調査:グループの凝集性(研究者が作成した項目)
26(32)	臨床実習初期段階におけるグループに関する教育的関わりを行い、グループダイナミクスの状態との関連を検討する	調査研究	質問紙調査:グループダイナミクスの実態(グループの中での自分のありよう、グループに対するイメージ、グループでの体験く連帯感をもったきっかけ)、今後の自分の課題)
27(33)	グループに関する教育的かかわりを行い、グループダイナミクスに関する学生の評価をの実習時期により比較検討する	調査研究	質問紙調査:グループダイナミクスの実態(グループの中での自分のありよう、グループに対するイメージ、グループでの体験)
28(34)	学生がグループ内の学生をどのようにとらえているか、患者に対してはどうかを実習経過と実習評価点の高低により検討する	調査研究	シンボル配置テスト:对学生・对患者の対人関係の捉え方 評価点:実習評価
29(35)	学生との対人関係に伴う刺激が学生に及ぼす心理的影響及び対処行動の実態を解明し、不安感情や自尊感情と心理的影響及び対処行動との関係を検討する	調査研究	質問紙調査:対人関係の認知のしかた、心理的影響、対処行動、不安感情と自尊感情の高低
30(36)	実習グループにおける学生の緊密度と「私」「人間」概念の変化度を検討する	調査研究	質問紙調査:グループ人間関係の緊密さ、SD法による「私」「人間」概念
31(37)	実習グループに所属したことへの学生の意識、学習内容の実態を解明する	調査研究	質問紙調査:グループへの意識と学習内容(グループに所属できて良かったか、グループの実習への影響の有無、理想とするグループ、グループ単位の実習を通しての学び)

tion, M機能)より成り立っているとした。

## (2) わが国の教育及び看護におけるグループ学習の歴史的背景

グループ学習は「小集団をひとつの単位として学習を進める学習形態である」といわれている<sup>5)</sup>。一般の学校教育におけるグループ学習については戦後新教育の中で「共同学習」「分団学習」などの言葉と同義に使われていた。1946年の文部省の新教育方針では、グループ学習について「5～6人の班に分け各班で共同して学習する方法、いわゆるグループ学習をとる方法がよいであろう。かかる学習の間に、協同・連帯の精神が養われていく」と述べられていた<sup>1)</sup>。その後も、人間的資質や問題解決能力を育成するために、学生が主体となり学べる形態の一つとして定着している。

一方、看護の中でのグループ学習が注目されてきたのは、臨床看護が看護者のチームによる活動で機能することや、患者に対する集団指導が看護実践の一手法であることから、臨床看護においても看護教育においても教育方法として受け入れやすかったからであるといわれている<sup>1)</sup>。また、看護学を学生が実践的に主体的に学ぶことができるように、必然的に実習や演習におけるグループ学習の形態がとられてきた。カウンセリング理論に基づくエンカウンター・グループに参加する<sup>6)</sup>などグループについて体験的に学んだ看護者及び教育者は少なくないといわれている。しかし、前述したように、武井ら<sup>2)</sup>は、看護教育においては、グループに関して体験的な理解にとどまっておらず、グループに関する理論的な基盤を持つ取り組みが少ないことを指摘している。

## (3) 抽出文献による研究の動向

今回抽出した文献を検討した結果から、看護学実習グループの人間関係に関する研究の動向について、研究内容に関するカテゴリー毎に記述する。

### ① グループダイナミクスの構成要因の検討

この研究は9件あり、グループダイナミクスが有効に働いているグループであるかということとそのグループの中に作用している関係的要因や心理的要因などのグループダイナミクスを構成する要因との関連を検討していた。

1件はグループの凝集性(まとまり度)をグループダイナミクスがうまくいっているかどうかの基準に

していた。早見ら<sup>7)</sup>は実習グループの凝集性を学生の主観により評価し、その時の心理を自由記載により分析した。凝集性の高いグループは、「実習が楽しみ」「やっていけそう」「意見を出しやすい雰囲気」などの要因が多く、低いグループは「不安」「気を使う」等のマイナス要因が多かった。

4件は、メンバーの実習グループに対する肯定的認識の有無をグループダイナミクスが有効に働いているかどうかの基準としていた。このうち前田らの2件は<sup>8)9)</sup>、グループへの肯定的認識と研究者が作成したグループダイナミクスの構成要因との関連を検討し、うまくいっているグループは「協力しあえる」などの親和的要因があることが明らかになった。また、1件<sup>10)</sup>はグループへの肯定的認識の有無と研究者が作成したグループダイナミクスを有効に働かせる要因を検討し「向上心がある」「積極性がある」「助け合える」「言い合える」「明るい」の5項目に関連がみられた。弓場ら<sup>11)</sup>はグループへの肯定的認識の有無とグループダイナミクスの構成要因との関連を検討、よいグループの条件としてお互いがよき理解者であることを学生は考えていることを明らかにした。

1件は学生から見た実習グループに対する基準を検討していた。柴田ら<sup>12)</sup>が行った研究で、学生にグループの良かった点、悪かった点を自己評価させ、学生から見たよいグループの基準を抽出し、ソシオメトリ理論による基準と比較検討していた。

2件は「指摘しあえる」ことをグループダイナミクスが有効に働いている基準としていた。このうち1件<sup>13)</sup>は、研究者が作成した対人相互作用の構成要因との関連を検討し、「刺激しあえる」「わかりあえる」などの要因との関連があった。1件<sup>14)</sup>は「指摘しあえる」グループのメンバーの生活習慣及び健康状態との関連を検討していた。「指摘しあえる」グループはよい生活習慣を持っていたことが明らかとなった。

また、谷口ら<sup>15)</sup>はグループ関係の因子の中で、「支持的雰囲気」「自己表現」「メンバーの助言」などの因子が重要であるとしていた。

以上グループダイナミクスが有効に作用しているグループの基準については、グループの凝集性(まとまり度)、グループに対するメンバーの肯定的認識の有無、「指摘しあえる」グループ関係等を基準にしている研究に大別できた。

グループダイナミクスの構成要因については、構成要因を心理学的基盤から検討している研究、学生の心

理の実態から帰納的に作成を試みているもの、心理面以外の健康や生活習慣など身体的、環境的要因との関連を検討しているものがあつた。

## ②グループダイナミクスと実習満足感・実習成果

このカテゴリーは8件あつた。2件はグループのエゴグラムパターンと実習評価・満足感との関連を検討していた。このうち小河ら<sup>16)</sup>は、学生の実習の自己評価の高低別にグループのエゴグラムパターンを分析し、異なるエゴグラムパターンを持つグループの方が同一パターンのグループより、実習評価が高いことを明らかにした。また、山田らの研究では<sup>17)</sup>PM理論を基に作成した学生のグループに対する評価及び実習成績とエゴグラムパターンとの関連を検討し、評価及び成績がよいグループと特定のエゴグラムパターンとの関連がみられた。

4件はグループの凝集性(まとまり度)に注目していた。このうち伊藤ら<sup>18)</sup>の研究では、ソシオメトリックテストと学生の実習満足感の関連を検討し、まとまり度の高いグループは満足感が高いという結果を得ていた。大柴ら<sup>19)</sup>はソシオメトリックテストによりメンバーの対人感情の傾向を調査し、グループ内の人間関係と実習成果の関連を調査した。人間関係が実習をしていく上で障害となつたことがあると答えた学生が全体の30%程度、効果的になつたことがあると答えた者も30%程度であるという結果を得ていた。三木ら<sup>20)</sup>はまとまり度について集団の凝集性項目を基に作成した質問紙により調査し、実習達成感との関連を検討したが、まとまり度の低いグループにおいても高い達成感を得ていたことから、まとまり度と達成感との関連は見られないとしていた。谷口ら<sup>21)</sup>は、PM理論を基に作成した質問紙により、グループダイナミクスの状態と、実習満足感との関連を検討し、グループの人間関係が強まるほど満足感も高いことを明らかにした。

小野ら<sup>22)</sup>はグループにおけるコミュニケーションの状態、人間関係の緊密さ、緊密になつたきっかけ、グループ内で感じた気持等のグループダイナミクスの実態をとらえ、学生からみた人間関係の状態と実習意欲との関連を検討していた。人間関係は8割以上が緊密であつたが、人間関係の状態と実習意欲との関連は前半・中半より後半が低くなつた結果から、お互いが向上するほどの関係は作られていない実態を考察していた。

本田ら<sup>23)</sup>の研究では、自己評価とグループダイナミクスの状態と実習意欲の関連を実習経過に伴い検討し、自己評価が高くグループダイナミクスの状態も実習経過に伴い上昇したグループは実習意欲も上昇していたが、自己評価が低くグループダイナミクスが低下した方は、実習意欲の上昇はみられなかつた。

以上エゴグラムパターン、グループの凝集性などと実習意欲・満足感との関連を検討していた。

## ③意図的な実習グループ編成による教育効果

このカテゴリーの研究は5件あつた。

2件はグループメンバーの状況によるグループ編成を行つていた。横田<sup>24)</sup>、渋谷ら<sup>25)</sup>はメンバーの基準としてYGテスト、エゴグラム、学科成績を用いて編成し、実習評価(成績)、実習内容、メンバーからみたグループ機能の評価との関係を検討した結果、意図的なグループ編成によりグループダイナミクスの評価が高くなつたことを明らかにしている。

2件はグループの凝集性に注目していた。このうち百瀬<sup>26)</sup>は、ソシオメトリックテストの結果をもとにグループ編成を行い、実習評価との関連を検討し、グループ間の結合が緊密であるグループの方が実習評価が高いという結果を得ていた。田川ら<sup>27)</sup>はソシオメトリックテストの結果をもとにグループ編成をして、実習中、実習後のグループの凝集性の変化を検討したが、編成時に凝集性が低かつたグループでも実習中に凝集性が高くなる傾向がみられたことから、意図的な編成による効果がみられなかつたとしていた。

本間ら<sup>28)</sup>は、領域別実習の期間である1年間、グループを固定化し、学生の固定化への肯定・否定の意識、グループ固定化の効果、固定化への意見・感想を調査し、半数以上の学生に固定化の影響がプラスに作用していたという結果を得た。

以上、実習のグループ編成は、心理・性格特性及び成績(知的能力)などに注目した編成、グループの凝集性に注目した編成、グループを長期間固定化した編成に大別でき、これらの基準により編成したグループと教育効果との関連を検討していた。

## ④教育的関わりとグループダイナミクス

このカテゴリーの研究は5件あつた。

3件は、実習開始前にグループダイナミクスが有効に働くために教員が動機付けを行つていた。このうち尾山ら<sup>29)</sup>は、個と組織の統合を図るための人間関係訓

練 (Organization Development) を基盤にしたゲームを動機付けとして行い、グループ内の相互作用の変化を検討していた。伊藤ら<sup>30)</sup>は、コミュニケーションの体験学習と人間関係をテーマにしたグループ討議を導入教育として実施し、実習への満足度、導入教育の有効性などを調査し、満足度と導入教育の有効性は約8割が良好であったという結果を得ていた。大野ら<sup>31)</sup>は、グループの凝集性を高めることを目的に、自分や他者の認知を促すための実習のまとめを行い、凝集性に関して調査した結果、教育的関わりによりグループの協調関係が高まったことを明らかにしている。

2件の研究では実習開始前に教員がグループ作りの動機付けを行い、さらにグループ関係をサポートする日常的関わりをしていた。このうち鎌田ら<sup>32)</sup>は、グループ作りの動機付けとしてのグループ討議と、カンファレンス場面の発言のしかたや偏り、人間関係等へ配慮した学生への日常的関わりを行い、グループダイナミクスの状態に関する調査をし、効果を検討したところメンバー間の関係やグループの状態を肯定的に受けとめていた者が多かった。斎藤らは<sup>33)</sup>は同様の方法で実習期間を1年間にわたって調査し、後期の方がまとまっていった実態を明らかにした。

以上、このカテゴリーの研究では、グループ討議、ゲームなどの教育的手法を用いて様々な動機付けを行ったり、実習中に人間関係についての配慮をしており、これらの教育的関わりと教育効果の関連が検討されていた。

#### ⑤グループダイナミクスの実態

このカテゴリーの研究は4件あった。

石橋ら<sup>34)</sup>は、学生がグループ内の学生の対人関係をシンボル配置テストにより把握し、実習経過による変化を中心に検討したところ後半時には前半時より近づいており、緊密性の増加がみられたとしていた。

三浦ら<sup>35)</sup>は、学生の対人関係が及ぼす心理的影響と対処行動を調査し、不安感情・自尊感情との関連性を検討した。8割の学生は肯定的認知・積極的対処行動としていたが、自尊感情が低い学生、不安が強い学生は、対人関係の刺激を否定的に受け止め、消極的・回避的対処をしていた実態を明らかにしていた。

小野ら<sup>36)</sup>は、グループの人間関係の緊密さと、グループ内で感じている気持ちを調査した。また、イメージを定量化するための手法であるSD法 (Semantic

Differential Method) により、「私」「人間」概念を測定した。グループ内の緊密度が高いグループの方が肯定的・友好的気持ちを持った者が多く、2つの概念が変化していたことから、グループ全体の傾向が個人に影響したという結果を得ていた。

弓場ら<sup>37)</sup>は、グループに所属できてよかったかという意識とグループの実習への影響の有無、理想とするグループ、グループ単位の実習を通しての学びを調査し、グループの実態を明らかにしていた。

以上、グループダイナミクスの実態について緊密さやメンバーへの影響などの面から検討されていた。

## 4. 今後の課題

以上、看護学実習における人間関係についての研究の動向を概括してきたが、今後の課題について研究内容毎に考察する。

### 1) グループダイナミクスの構成要因

グループダイナミクスが有効に働いている実習グループであるかどうかとグループの構成要因との関連の検討では、グループダイナミクスが有効に働いているグループの基準は、凝集性 (まとまり度) を基準にしている研究、グループに対するメンバーの肯定的認識の有無、「指摘しあえる」グループ関係の基準があり、よいグループの基準は特定されていない。

グループの凝集性について武井は、「凝集性はわれわれ意識として感じられ、これが高いグループはメンバーが自分が受け入れられたという安心感が得られ、コミュニケーションが活発となり、相互の影響力も強くなり、効果的なグループワークの必須条件ともいえる。」<sup>2)</sup>と述べている。一方、極端な凝集性は、メンバーへの影響力を強め、個人の思考のコントロールにつながる場合もあることを指摘している。凝集性のような心理的概念を取り入れる場合はその意味内容の検討が必要であり、グループダイナミクスにおける利点と欠点の両面から検討が必要であると考えられる。

また、「指摘しあえる」グループ関係を基準にした研究はその基準を選択した根拠の記載がなく、研究者が基準として用いた判断過程を示すことでより説得性が増すと考える。

さらに、グループの中でどのような要因がグループダイナミクスが有効に働くために関係しているかについての探求は、グループダイナミクスの構成要因を心理学的基盤から検討している研究、学生の心理の実

態から帰納的に抽出している研究、心理的要因以外の健康や生活習慣などの身体的、環境的要因との関連を検討している研究があった。

心理学的基盤から検討している研究の中には、研究者の作成した調査用紙の基盤となる理念を示す記述がないものや、先行文献の方法をそのまま使用しているものもあった。

身体的、環境的要因を探索した研究は、看護学実習は緊張の高い経験が続き、身体面の状態が心理面に影響しやすいことから考えると意義のある取り組みであると考えられる。また、学生の心理の実態に視点をあてた帰納的な要因の探索は、グループの主体は学生であることから考えると重要な探求の取り組みであり、研究の継続が必要であると考えられる。

## 2) グループダイナミクスと実習満足感・実習成果

このカテゴリーの研究は、エゴグラムパターン、グループの凝集性などを調査し、実習満足感・実習成果との関連を検討していた。

看護学実習の目的は、各学生の学習目標の達成であるので、グループ関係がそれぞれのメンバーにどのように影響するのかを検討していくことが重要であると思われる。

## 3) 意図的な実習グループ編成による教育効果

グループメンバーの構成要因としては、心理・性格特性、成績（知的能力）などのメンバーの資質のバランスに注目した編成、グループの凝集性に注目した編成、グループを長期間固定化した編成があった。

グループ編成基準を考える際、心理学的には「小集団内異質」「小集団間同質」が基本といわれている<sup>1)</sup>。つまり、グループ内には異なる要素があった方がお互い刺激し、不足を補いあうことでよい効果が得られ、グループ間はあまり差がない方が全体のバランスがよいという見方がある。看護学実習の教育実践における経験的知識だけでなく、一般的な心理学的及びグループ理論における知識についても検討し、研究者がそれらをどのように判断し、どのように具体化していくかについて吟味することは、今後もグループ編成に関する研究に際して必要な姿勢であると考えられる。また、編成基準を多面的に研究し、研究結果を教育実践に反映させていくことで効果的な実習教育を行うことができると思われる。

## 4) 教育的関わりグループダイナミクス

これらの研究ではグループ討議、ゲームなど様々な教育的手法で動機付け及びグループの人間関係に対する配慮と教育効果の関連が検討されていた。

武井<sup>2)</sup>は、グループを安定させるための教員の関わりが不可欠であると述べている。これらの研究はまだ少数である。

## 5) グループダイナミクスの実態

グループダイナミクスの実態については、グループ関係の緊密さやグループダイナミクスの状態のメンバーへの影響などの側面から検討されていた。看護学実習グループのグループダイナミクスの実態解明が必要であると考えられる。

## まとめ

看護学実習に関するグループの人間関係の研究についての国内の文献を検討したところ、過去20年間に31件あり、①グループダイナミクスの構成要因の検討②グループダイナミクスと実習満足感・実習成果③意図的な実習グループ編成による教育効果④教育的関わりとグループダイナミクス⑤グループダイナミクスの実態の側面から検討されていた。これらの研究はまだ少数であり、今後も、多面的な取り組みにより研究の継続が必要である。

## 引用文献

- 1) 村本淳子編：わかる授業をつくる看護教育技法2 討議を取り入れた学習法, 医学書院, 東京, 2001.
- 2) 武井麻子：グループという方法, 医学書院, 東京, 2002.
- 3) D.F. ポーリット, B.P. ハングラー. 近藤潤子監訳: 看護研究 原理と方法. 東京, 医学書院, 1994.
- 4) 平野香: 対人関係の基礎知識 カウンセリングとグループダイナミクスの活用, 日本看護協会出版会, 東京, 1993.
- 5) 依田新: 新・教育心理学事典, 金子書房, 東京, 1978.
- 6) 武井麻子他: ケースワーク・グループワーク, 光生館, 東京, 1994.
- 7) 早見貴子, 片山百合子: グループ「まとまり度」の心理に及ぼす影響その1—臨床実習グループ内の人間関係の意識調査—, 日本看護学教育学会誌, 9(2), 71, 1999.
- 8) 前田勇子, 弓場紀子: 隣地実習グループを肯定的に認識するための要因—編成後の経過時期における特徴—, 日本看護学教育学会誌, 10(2), 137, 2000.
- 9) 前田勇子, 弓場紀子: 臨床実習グループに対する肯定的な認識に関わる要因—編成後の経過における特徴—,



- 大阪市立大学看護短期大学部紀要, 3, 37~43, 2001.
- 10) 前田勇子, 弓場紀子:臨床実習グループに対する学生の認識-実習経過に伴うグループ評価に関わる要因-, 日本看護研究学会雑誌, 20(3), 117, 1997.
  - 11) 弓場紀子, 前田勇子:臨床実習におけるグループダイナミックスの検討-達成関連動機尺度との関連から-, 日本看護研究学会雑誌, 20(4), 58, 1997.
  - 12) 柴田恵子, 田川伸子, 岩瀬祐子:臨床実習を効果的にすすめるためのグループ活動に関する一考察(第3報), 日本看護研究学会雑誌, 17(4), 63~64, 1994.
  - 13) 弓場紀子, 前田勇子:臨床実習において指摘し合えるグループの構成要因の検討, 日本看護学教育学会誌, 7(2), 97, 1997.
  - 14) 弓場紀子:臨床実習におけるグループダイナミックスの検討-グループメンバーの健康度・生活習慣との関連から-, 日本看護学教育学会誌, 8(2), 117, 1998.
  - 15) 谷口敏代, 林幸子:臨床実習グループの人間関係に関する研究-学生の自尊感情と実習関連要因との関連-, 日本看護学教育学会誌, 7(2), 98, 1997.
  - 16) 小河育恵, 掛橋千賀子:臨床実習におけるグループ編成に関する一考察-エゴグラムの活用を試みて-, 日本看護学会第28回集録看護教育, 22~25, 1993.
  - 17) 山田豊子, 伊藤良子:臨床実習でのグループダイナミックスの評価について-T E G(東大式エゴグラム)からみた一考察, 京都市看護短期大学紀要, 25, 29~38, 2000.
  - 18) 伊藤美恵子, 柴田恵子, 岩瀬祐子他:臨床実習を効果的にすすめるためのグループ活動に関する一考察, 日本看護研究学会雑誌, 14(3), 34~35, 1991.
  - 19) 大柴弘子:臨床実習におけるグループダイナミクス-人間関係と実習成果-看護展望, 11(8), 61~69, 1986.
  - 20) 三木隆子, 西村三千代, 今崎順子他:実習グループのまとまりと達成感との関係, 日本社会保険医学会第37回プログラム・抄録集, 208, 1999.
  - 21) 谷口敏代, 林幸子:臨床実習グループの人間関係と実習満足度との関係, 日本看護学会第25回集録看護教育, 105~108, 1997.
  - 22) 小野ツルコ, 天津栄子, 稲垣美智子:実習グループにおける人間関係の検討, 日本看護学会集録第14回看護教育, 311~315, 1983.
  - 23) 本田優子:精神科看護実習における学生の変化-自己評価・グループダイナミクス・実習意欲-, 日本看護研究学会雑誌, 20(4), 44~45, 1997.
  - 24) 横田栄子, 白井陽子, 清田敏恵他:臨床実習における教育効果の分析(その2)-実習の達成感を高めるためのグループ編成の検討, 日本看護学会第22回集録看護教育, 188~189, 1991.
  - 25) 渋谷さよ子, 白井陽子, 秋田真智子他:臨床実習における教育効果の分析(その3)-長期実習における効果的なグループ編成の検証, 日本看護学会第23回集録看護教育, 105, 1992.
  - 26) 百瀬ちどり:効果的な実習のためのグループ構成の検討-ソシオメトリ-理論によるグループ構成を試みて-, 看護教育, 34(2), 145~147, 1993.
  - 27) 田川伸子, 柴田恵子他:臨床実習を効果的にすすめるためのグループ活動に関する一考察(第2報)-グループ編成を試みて, 日本看護研究学会雑誌, 15(4), 62~63, 1992.
  - 28) 本間昭子, 石塚敏子, 土橋祐子他:実習グループメンバー固定化の分析, 看護教育の研究, 17, 149~151, 2000.
  - 29) 尾山とし子, 千葉京子, 渡辺浪二他:看護学実習におけるグループの凝集性に影響する要因の検討-コミュニケーションスキルの向上をめざして-, 日本赤十字武蔵野短期大学紀要, 14, 85~91, 2001.
  - 30) 伊藤好美, 近田敦子, 三浦昌子他:初回病棟実習に向けての導入教育の検討-対人関係に視点を当てて-, 日本看護学会集録第23回看護教育, 48~50, 1992.
  - 31) 大野順子:臨床実習グループの人間関係形成について-フィードバックを試みて-, 看護教育の研究, 18(1), 141~143, 2002.
  - 32) 鎌田ミツ子, 斎藤久美子, 平典子他:臨床看護実習初期段階におけるグループダイナミックス, 弘前大学医療技術短期大学部紀要, 15, 11~16, 1991.
  - 33) 斎藤久美子, 鎌田ミツ子:臨床看護実習におけるグループダイナミックス(3), 弘前大学医療技術短期大学部紀要, 16, 28~31, 1992.
  - 34) 石橋文枝, 島田友子:臨床実習における看護学生の対人関係に関する研究, 日本看護科学学会誌, 15(3), 181, 1995.
  - 35) 三浦麗子, 伊藤暁子:臨床実習の対人関係が学生に及ぼす心理的影響とその対処行動(第4報), 日本看護研究学会雑誌, 16(3), 90~91, 1993.
  - 36) 小野ツル子, 稲垣美智子, 天津栄子:看護実習における学生のグループダイナミックスの研究, 金沢大学医療技術短期大学紀要, 8, 25~29, 1984.
  - 37) 弓場紀子, 前田勇子:看護基礎教育におけるグループ単位の臨床実習の意義, 第31回日本看護学会論文集 看護教育, 173~175, 2000.